

ワーク・ライフ・バランス神戸地域セミナー

アフターコロナを見据えた新しい働き方について学ぶセミナーが、
10月26日、オンライン配信で行われました。

Lecture
講演

アフターコロナの新しい働き方 ～在宅勤務からワーケーションまで～

関西大学社会学部
教授 松下 慶太氏



コロナ禍でオフィス勤務とテレワークを組み合わせたハイブリッドな働き方が世界的に広がっています。米国のGoogleでは約6割の社員が該当するそうです。では、コロナ禍が終われば、元通りの出社スタイルに戻るのでしょうか。米国のアンケート調査によると、週2日以上テレワークを希望する人は56%、毎日テレワークを希望する人は19%いるという結果が出ています。

日本の大学生に将来希望する勤務スタイルを聞いたアンケート調査でも、54%が週1～2日、23%が週2～3日のテレワークを望んでいることが分かりました。

2000年以降に生まれた「Z世代」と呼ばれる彼らは、SNSをはじめ多様なメディアに囲まれて育った「リモートネイティブ」で、オンラインで済むことはオンライン、必要なことだけオフラインで行うことを好んでいます。時間や場所、人数などの制限が柔軟なオンラインと、ライブ感のあるオフライン。彼らを採用するには、それぞれの長所をうまく取り入れた働き方ができる環境を用意することが求められています。

ハイブリッドな働き方が進む中で、オフィスの役割は変わりつつあります。多くの人は、対面式のコミュニケーションが必要な時のみ出社するようになりました。ただし、まだ一

部の人は、快適なテレワーク環境が整っていないため、集中して作業を行う目的で出社しています。ハイブリッドな働き方を浸透させるには、企業や社会がもっと協力すべきです。

また、新しいライフスタイルの一つとして、旅行先での時間を仕事に充てる「ワーケーション」という働き方も増えてきました。いつもと違う場所で仕事をすることで、リフレッシュできるのはもちろん、イノベーションを生み出す可能性があるのが利点です。ただし対象者をどうするのか、旅費や滞在費はどこまで会社が負担するのかなどの課題もあります。

これら新しい働き方は、「ウェルネス」「コラボレーション」「クリエイティブ」の3つの観点から見ることができます。健康で心豊かな状態(ウェルネス)と家族・会社・地域での交流(コラボレーション)が新しいアイデアや事業を創出(クリエイティブ)する一方、健やかで心豊かな状態は家族・会社・地域での交流により支えられているというように、これらは影響を及ぼし合っています。

コロナ禍で人々の価値観やニーズは変わりつつあります。アフターコロナの時代は一人ひとりが自身のライフスタイルに合わせ、働きたいように働ける社会を実現させなくてはなりません。

Case study
事例発表

遊ぶなかでいい仕事生まれる ～ROKKONOMAD(ロコノマド)の取組～

有限会社Lusie
代表 小泉 寛明氏



弊社が運営する「ROKKONOMAD」は、神戸の市街地からほど近い六甲山上に今年3月、オープンしました。静かに仕事をする部屋、雑談可能な部屋、会議室など目的に応じたさまざまな部屋と、1泊から長期ステイまで可能な宿泊設備があるほか、バーベキューもできます。

街中のオフィスでは効率的に仕事ができますが、ついオーバーワークになりがちで思考が凝り固まってしまうため、時には強制的に自然の中でオフラインの状態をつくり、リフレッシュすることが必要ではないでしょうか。

自然の中では集中力が高まり、思考が切り替わります。誰にも邪魔されないので企画書や原稿を作成するのに適しているほか、テレワークにより顔を合わせて仕事をする機会が減った職場の仲間とのコミュニケーションの場にすることもお

薦めです。また、仕事に行き詰まったら、散歩に出掛けて花を愛でたり鳥の声を聞いたりリフレッシュの時間を挟むことで、抱えていた問題の解決策を思い付き、いい仕事生まれるかもしれません。

現在の利用者は、神戸市や芦屋市など六甲山周辺の方が多く、平均年齢は46歳。フリーランスのクリエイターが新しいアイデアを練る際に利用したり、会社員が個人的に契約して週に一度仕事場にしたりするほか、都会のオフィスを引き払った企業が社員の集まる場として活用したりと使い方はさまざまです。

無理をして遠くまで出掛けなくても、近場の自然の中で息抜きをする。アフターコロナは、そのような働き方がどの企業でも認められるようになってほしいです。